一話

「……料理、できたんだな」
ボロアパートのキッチンにて。
じゃがいもの皮を剥きながら半ば独り言のように告げた俺に、彼女、ジャンヌ・オルタはフンと鼻を鳴らした。
「練習したのよ。あの冷血女が煽ってくるから。王様の癖に給仕の真似事なんて笑えるわよね」
ハッ、と蔑むように笑いながら、お玉の上で味噌を溶くエプロン姿の竜の魔女。
冷血女、とはセイバー・オルタの事だろう。メイド・オルタとして装いを新たにした彼女は、料理に対しても意欲的な態度を示していた。それに対抗して、この銀髪の魔女も料理の習得に取り組んだという所か。
「仲がいいんだな、二人は」
「ハァ？　アンタ、ちゃんと私の話聞いてた？」
「ああ。互いに競い合う良きライバルという風に聞こえたが」

「違うから違うから違うから。全ッ然違うから。お互い、ただ気に食わないだけよ」
ジャンヌ・オルタはそう言うが、セイバー・オルタの方は割と好意的な反応をしていたはずだ。もっとも、ライバルというよりは、打てば響く良い玩具という扱いだったが。その大人びた余裕は王様としての器故か。
「それにしても……」
「？　何よ？」
「いや、その……絵面が、すごいな。初めて会った頃には想像もできなかった」
こちらの視界には、可憐なエプロン姿で味噌汁をかき混ぜる竜の魔女の姿がある。ファヴニールを駆り空を舞っていた彼女がこんな家庭的な風景に混ざることになるとは、当時の誰もが思っていなかっただろう。
感慨深い、と頷くこちらに、しかし彼女は自嘲気味に笑みを浮かべた。
「……ええ、そうでしょうね。竜の魔女がキッチンに立つなんてやっぱりナシよね」
「いや、そこまでは言ってない。俺はいいと思う」
「気を遣わなくたっていいのよ、マスター？　正直に言えばいいじゃない。『おまごとは他所でやれ』って」

「俺はすごくいいと思う」
「ッ……」
「すごく、いいと、思う」
「強調しなくていいわよ！　ああもう、何なのよこのマスターは……！　感性捻じ曲がりすぎでしょう！？」
「否定はしないが……」
あの魔境が如きカルデアで人理修復の旅を駆け抜けたのだ、感性の一つや二つは捻じ曲がってしまっても仕方ないだろう。
「だが、少なくとも今の俺はエプロン姿の竜の魔女にいいねを押したい。拡散もしたい」
「そんなＳＮＳみたいに言わなくてもいいでしょ……」
「写真を撮ってカルデアのグループチャットに上げてもいいか？」
「端末を燃やされたいのならお好きにどうぞ？」
「……チャットには上げないから写真を撮ってもいいか？」
「どうするのよ、魔女の写真なんか撮って」

「魔除けに」
「むしろ引き寄せそうな気がするわね」
こちらの言葉に彼女はけらけらと笑って、それからこちらの方を横目で見つめてきた。
「……何よ。撮らないの？」
「撮っていいのか？」
「アンタがそう言ったんでしょう？　ほら、撮るならさっさとなさい」
「あ、ああ……」
言われ、慌てて携帯端末を取り出す。
液晶画面の中、竜の魔女は味噌汁をかき混ぜながら、視線だけをこちらに向けていて。
「……もうちょっと、何かないのか。こう、ピースとか」
「そこまでサービスする気はありません。それに、竜の魔女が味噌汁作ってる絵面の方がオイシイでしょう？」
「いやオイシイにはオイシイが……」

「……しょうがないですね」
ハァ、と溜息を吐き、それから彼女は、フッと淡く微笑んでみせた。
「ほら、これで満足ですか？」
「……」
「……ちょっと。何ぼさっとしてるのよ。早く撮りなさいよ」
「あ、ああ……はい、バター」
ぱしゃり、とシャッター音が響くや否や、魔女は不敵な笑みを浮かべた。
「魔女の写真を撮るなんて。変な霊に憑りつかれても知りませんよ？」
「その時は君が助けてくれるだろう？」
「……バッカじゃないの？」
微笑みかけた俺に、彼女はフン、と鼻を鳴らして。
頬を赤らめながら、ずい、と小皿を差し出してきた。
「これ、味見して。アンタの方がこの国の味に馴染み深いでしょ？」
「ん、ああ……」
言われ、小皿を受け取り一口。

「……美味い」
「優しいお言葉をどーも」
「いや、お世辞抜きに美味い。正直、砂糖と塩を間違ってても仕方ないとすら思っていたが」
「マスター？　一旦小皿を置いてください。少し話があります。ええ、今ここで燃やすわ」
「アパートごと全焼しかねないなそれは……しかし、なんだ。すごいな、ジャンヌ・オルタは。異国の料理をここまで……」
　素直に称賛の言葉を口にするこちらに、彼女は今一度鼻を鳴らした。
「このくらい、できて当然です。相応の時間を費やしたんだもの、誰だってこれぐらいは……」
「そんなことはないだろう。いや、たとえそうであっても、相応の時間を費やし努力した君はすごいと思う。誇っていい事だ、間違いなく」
「……」
　俺の言葉に、彼女は無言を貫いた。

だが、否定の言葉を吐かなかったということは、多少なりとも受け止めてくれたという事だろう。
「しかし、なんというか……対抗心だけでそこまでできるとは。本当に負けず嫌いなんだな、君は」
「……」
「待て、何故そこで俺を睨む」
「別に？　魔女に睨まれるなんてありふれた事でしょう？」
フン、と再び鼻を鳴らし、ジャンヌ・オルタはコンロの火を止めた。
「さ、そっちの芋を寄こしなさい。皮剥き、全部終わってるんでしょうね？」
「あ、いや……すまない、まだいくつか残ってるんだ」
「ハァ？　ちょっと、手際が悪すぎるんじゃないの？」
「申し訳ない……」
まさかエプロン姿の彼女にしばし見惚れていたとは言えず平謝りするこちらを、彼女は浅く睨んできた。
「……まさか、初仕事でへばってるんじゃないでしょうね？　もしそうなら向こう

で休んで……」
「それはない。大丈夫だ。安心してくれ」
「そう？　ならいいけど……」
「……心配、してくれたのか？」
「……別に。ただ調理中に倒れられたら色々厄介だと思っただけよ」
そう言ってまた鼻を鳴らす。
「ほら、さっさと剥きなさい芋を。この国には文明の利器があるのでしょう？」
「ピーラーをそこまで大げさに言う人は初めて見たな……」
苦笑しながら芋剥きを再開するこちらの隣、ジャンヌ・オルタもまた未だ剥かれていないじゃがいもを包丁で剥き始めて。
その共同作業に、ふと新婚のような錯覚を覚え、かぁと頬が熱くなった。
……セイバー・オルタには、後で感謝の電話をするとしよう。
彼女がいなければきっと、こんな夢のような光景はお目にかかれなかっただろうから。

世界を救い、その後処理を全て済ませた後、自分はカルデアには残らず日常に帰るという選択をした。
元々、魔術の腕はからっきしだったものだから、カルデアの研究員として残るというのは少し無理のある話だった。
ダヴィンチちゃんを始めとしたメンバーたちは別れを惜しみながらも、最後には快く送り出してくれた。
『どうか元気で。君に最上の幸福があることを祈るよ』
涙ながらにこちらの手を取り、笑顔を見せてくれたダヴィンチちゃんの顔を覚えている。
そうして、僅かな資金と幾つかの魔術礼装を手に、カルデアを出た俺を、ジャンヌ・オルタは追いかけてきた。
『地獄の底までついてきてくれるのでしょう？　なら、私がアンタについていくのも道理よね？』
そう言って不敵に笑う彼女と共に、エミヤから紹介された街へとやってきたのが

つい五日前。
それからバイト先やらアパートやらを探し、どうにか初出勤日と相成ったのが今日。
昨日までは外食で済ませていたのだが、そろそろ自炊を始めようと思い立ち、帰り道にある商店街で食材を買って帰った先で、
『そう。なら早速作りましょうか、夕食』
と言って、当然のようにエプロンを着用したジャンヌ・オルタにぽかんと口を開けたのが一時間前。
ほぼ彼女主体で作られた肉じゃがと味噌汁に舌鼓を打ったのが三十分前。
そして今この時、俺はベランダで湯上りの身体を冷ましながら、
「♪～」
浴室から聞こえてくる鼻歌を聞いていた。
上手いものだ。今度カラオケに連れていきたいと思う程に。
しかし……。
「……どうにも、落ち着かないな」

夜空を見上げながら、独り言ちる。
彼女がついてきてくれると言った時、俺はどうしようもなく喜んだ。
恥ずかしながら、俺は彼女に恋をしていたから。
想い人である彼女とこれからも共にいられるという事実は、彼女と過ごす上での様々な障害を無視させるほどに自分の中で大きいものだった。
無論、彼女がサーヴァントとして、義理堅くもマスターである自分についてきてくれたという事は分かっていた。
それでも、俺は嬉しかった。
それ程までに、自分は彼女に惹かれていたのだ。
だが、ここに来て微妙に距離感を測り損ねている。
彼女との距離。
カルデアにいた頃は、ちょうどよい距離を保てていたはずだ。
だが、今になってそれを見失った。
いや、見失ったのは距離ではなく、ジャンヌ・オルタその人かもしれない。
……ああ、長々と続けてしまったが。

結局のところ、俺はただ、いつになく家庭的な彼女に度肝を抜かれてしまっただけなのだろう。
今まで知らなかった一面を見せられて、彼女の輪郭を見失ってしまっただけ。
簡単な話だ。
何も、特別な事はない。
「……驚いたな」
彼女がおもむろにエプロンを着始めた時は何の冗談かと思った。
彼女は、魔女で。
家事などロクにできないと思っていた。
いや、魔女に家事能力を求める方がおかしいだろう。
だから、俺は彼女の代わりに家事をして。
彼女にはただ、側にいてくれるだけでいいと、そう思っていたのだが……。
「……」
おもむろに、携帯端末を取り出す。
そこにはエプロン姿の魔女の姿が待ち受けている。

「……良いな」
何度見てもいい。素晴らしい。最高だ。
まるで彼女が新妻のように見える。
……夢のようだ。
たとえ見てくれだけだとしても、涙が出てしまいそうになるほどに。
あり得ないとは分かっている。
彼女が自分に、好意を向けるなど、あり得るはずがない。
たとえ好意を向けたとしても、せいぜいマスターとしての信頼止まりだろう。
それでも十分すぎる程ではあるのだが。
「……」
本当に、夢のようだ。
最愛の彼女と、こうして共に生活をしているなんて。
これが人理修復の報酬なのだとしたら、あまりにも貰いすぎている。
「……落ち着かないとな」
そろそろ、彼女が風呂から出てくるだろう。

間違っても、妙なテンションで接してはならない。
彼女に愛想をつかされてはおしまいだ。
彼女の前ではせめて、立派なマスターとして振る舞うとしよう。
うん、と一人頷き、部屋に戻るべく振り向いたところで、
「むぐ」
頬に、冷たい感触が押しつけられた。
「引っかかってやんの。ふふ、ざまあみなさい」
こちらの頬に氷水の入ったグラスを押し当ててきた犯人は、やってやったとばかりに笑みを浮かべていた。
「……君なぁ」
げんなりとする俺に、寝間着であるTシャツ姿のジャンヌ・オルタはグラスを掲げてみせた。
「お水、持ってきてあげたわよ。崇め奉りなさい」
「……ありがとう」
「……どういたしまして」

礼を言ったこちらに彼女は憮然とした表情でそう言って、それからこちらの隣に立ち、夜空を見上げた。
「……星、全然見えないわね」
「カルデア一帯と比べると空気が汚れているからな」
「近代化の影響？」
「まぁそんなところだ。……好きなのか？　星」
「そんな風に見える？」
「……分からない」
「何よそれ。二択なんだからどちらか適当に言えばいいじゃない」
「……俺は、知らないからな。君の好きなものは、何も」
言って、自分もまた夜空を見上げる。
長い時間を、彼女と過ごしてきた。
数多の特異点を、彼女と廻ってきた。
それでも、自分は彼女の事をほとんど知らない。
竜の魔女。

彼が願い、そして紆余曲折の末、独自の存在として生まれ落ちた反英雄。
彼女が生まれた経緯は知っている。
だが、彼女自身については知らないことだらけだ。
好きなものも、嫌いなものも。
俺は、何も知らない。
「だから、適当になんて答えられないんだ」
情けない言葉を吐く俺に、
「……何よ、それ」
竜の魔女は呆れたようにそう言って、それから、
「……」
そっと、こちらの方へ身を寄せてきた。
「ッ！？　ジャンヌ・オルタ……ッ！？」
「そんなの、これから知っていけばいいでしょ」
慌てふためく俺に、彼女は当然のように告げる。
「私の好きなもの。私の嫌いなもの。全部、知っていけばいいじゃない。……これ

から、一緒に暮らすんだから」
最後にぽしょりと、つぶやくように付け加えて、
「だから、その弱々しい顔は今すぐやめなさい。情けないったらありゃしない」
「……ああ、そうだな」
彼女に鼓舞され、自然と笑みが浮かぶ。
すると彼女も、応えるように不敵な笑みを浮かべてみせた。
「良い顔になったじゃない。その方が歪ませ甲斐があるわ」
「そうか。……なぁ、ジャンヌ・オルタ」
「何よ？」
「その……笑顔の俺の方が好きか？」
「は？」
「いや、なんでもない。忘れてくれ」
「え、えぇ……」
こくりと頷き、しばらく黙り込んでから、ジャンヌ・オルタは口を開いた。
「……別に、表情なんてどうでもいいわよ。アンタがどんな顔してたって、アンタ

が私のマスターなのは変わらないし」
「……そうか。まぁ、そうだろうな」
頷きながら、胸の内に満ちる溜息に苦笑する。
彼女が自分をマスターとしか見ていないことなど、当の昔から分かり切っていたことだ。今更嘆くようなことでもない。
そう理解していても、どうしても落ち込んでしまう心持に未熟さを感じていると、
「でも、そうね……強いて言うなら、笑顔の方がいいわね」
「は？」
『強いて』よ『強いて』。別に好きってわけじゃないから」
でも、とジャンヌ・オルタはこちらの顔を覗き込みながら、
「私は、笑顔のアンタの方がいいわ。さっきみたいな顔よりもずっと」
そう、淡く微笑みながら告げてきた。
「……そう、か……そういう、ものか……」
舌が上手く回らない。
思考回路もだ。

ああ、ダメだ、本当に。
好きと言われたわけでもないのに。
ただ、良いと言われただけで、こんなにも舞い上がってしまう。
……未熟にも程がある。
人理を修復してなお、自分はまだまだ出来損ないだ。
「……だいぶ冷えてきたわね。湯冷めしないうちに戻りましょう」
「あ、ああ……」
彼女に示され、慌ててその後に続く。
あれだけ夜風に当たっていたというのに、脳は熱を帯びていて。
思考回路は、完全にショートしていた。
だから、口を滑らせた。
「じゃ、ジャンヌ・オルタ」
「何？　マスター」
「お、俺は……俺も、笑顔の君の方が、その……す、好きだ」
言ってから、やってしまったと脳裏で頭を抱えた。

こんな言葉、気色悪がられるのが関の山だ。
どうにか取り消せないかと策を弄しようとした俺の眼前、
「……バカじゃないの」
彼女は頬を赤らめながら、吐き捨てるようにそう言って、部屋へと戻っていった。
「……やってしまった」
はぁ、と一人溜息を吐く。
これでまた、彼女の好感度が目減りしたことだろう。
「せっかく、ああ言ってもらえたのにな……」
これから知っていけばいいと、共に暮らすことに肯定的な言葉をもらえたというのに、このままでは一月も経たないうちに出ていかれかねない。
「……頑張ろう」
彼女に愛想をつかされないように。
この夢のような日々が、少しでも長く続くように。
よし、と一人頷いて、俺もまた、部屋へと戻っていった。

「マスター……？」
「……寝てる、わよね？」
「というか、私が隣の布団にいるのによくもまぁここまで健やかに眠っていられるわね」
「まったく、人の気も知らないで……」
「誰のために、料理を練習したと思ってるのよ」
「アンタがカルデアを出るって聞いてから大変だったんだから」
「……まぁ、エプロン姿の私を良いと言ったのは称賛に値します。素直に褒めてさしあげましょう」
「夕食時に何度も何度も『美味い』と連呼したのはマイナスです。わざとらしいったらありゃしない。……そういったところで嘘は吐かない事は、分かっていますけど」
「……覗きにも来ませんでしたね。ええ、万が一覗いていたら燃やしているところでしたが。……ちゃんと女として見られてるのか不安になってきたわね」

「いえ、大丈夫、問題ありません。笑顔が好きと言ってましたから」
「……落ち着きなさい私。あくまで好きと言われたのは笑顔であって私個人ではないわ。こいつはそういうことを平気で言う女たらしよ。だから収まりなさい動悸……！」
「……私の事、迷惑だと思ってないかしら」
「勝手についてきたから仕方なく、なんて、思ってないかしら」
「そうよね。普通はきっとそう。だって私は、竜の魔女だもの」
「でも、こいつなら……」
「本当に、人の気も知らないで……」
「……いい事思いついたわ」
「これを、こうして……と」
「……ええ、そうよ。これはあくまでいけ好かないマスターを驚かせるため。決して私利私欲のためではないわ」
「……腕、意外とがっしりしてるわね」
「抱きしめられたら、どんな気分になるのかしら」

「……マスター……」
「……おやすみなさい」

「ん、んん……んん！？」
「くぅ……すぅ……」
「じゃ、ジャンヌ・オルタ！？　どうして俺の腕の中で眠っているんだ！？」
「んん……？　何ようるさいわね、もう少し寝かせなさいよ……」
「いや、だが、しかし……」
「もう五分だけ……」
「……なんなんだ、いったい」
「ん……マスター……」
「……寝顔が可愛すぎる」